

南北統一への道：チュチェ思想と統一思想

統一思想研究院副院長 大谷明史

(一) 序

1990年10月、東西ドイツの統一がなされた後、世界の目は韓半島の南北対立に注がれるようになった。しかし韓半島の南北の対立は、東西ドイツの対立よりも一層、尖鋭な様相を示している。それはその根底に、より深刻な思想的対立があるからである。特に北朝鮮は共産主義国家でありながら、マルクス主義を超えたチュチェ思想(主体思想)を樹立したと宣言している。ここでチュチェ思想の意義について考えてみようと思う。韓半島の平和的な南北の統一は、アジアと世界の重大な課題であり、その中でチュチェ思想の存在を無視することはできないからである。

文鮮明先生は南北の統一にたいして、北の唯物論にもとづいたチュチェ思想ではなく、また南の個人主義に傾いている民主主義でもなく、神主義・頭翼思想によるべきであると主張された。神主義とは、真の神様の全体像を明確に捉えることによって宗教の統一を目指すものであり、頭翼思想とは、右翼でもなく左翼でもなく、両者の欠点を除去し、長点を生かしながら、両者を統一する思想である。神主義・頭翼思想の核心となっているのが統一思想である。そこで本論においては、チュチェ思想と統一思想を対比しながら南北統一の真なる方策を探ることにする。

(二) 地上の樂園を目指したチュチェ思想

1982年、金日成主席の70歳を記念して平壤に主体思想塔が建設された。主体思想は金主席の思想であるが、マルクス・レーニン主義を創造的に発展させて新たに生まれた思想であるという。そして北朝鮮では、主体思想による真の社会主義、地上の樂園を標榜してきたのである。

マルクス・レーニン主義では、人間の本質的特徴については、解明できなかったが、主体思想は人間を「自主性、創造性、意識性」を持つ社会的存在として捉えることにより、「人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定する」という原理を発見したという。そして人間を単に進化の産物として見るだけではなくて、人間の価値を最も高い位置に押し上げたという。

タス通信の元平壤特派員のアレクサンドル・ジェービン (Alexander Zhebin) は、世界に向けての、主体思想の目覚ましいアピールとその成果について、その著『私が見た金王朝』(文芸春秋)で次のように述べている。

1978年に主体思想国際研究所が設立され、続いて中南米、アジア、アフリカ、ヨーロッパにも研究所が設立された。そして80年代を通じて世界的に主体思想の国際会議やセミナーが開かれた。80年代における主体思想の世界的な普及とその評価について、「労働新聞」は「偉大な主体思想は時代の主流」、「主体思想の火は世界を照らす」(53頁)という見出しを掲げ、「この10年間に、主体思想は世界公認のイデオロギーとして、五大陸五大洋を越えて世界に燦然たる光を放ち、いく億の人々の心をいっそう深く捕らえるにいたった」(53頁)と強調した。

1988年には、金日成主席の76歳の誕生日を記念して、76か国と8つの国際組織から参加した国際会議がアテネで開かれたが、その会議から金主席にあてて、「主体思想は人類共通の思想の成果として認められている」(54頁)というメッセージが送られた。

主体思想は不滅の思想、絶対的真理であり、人類思想の頂点を極めたイデオロギーであるとされ、主体思想によって、真の社会主義、地上の楽園、人類共通の価値ある社会、金主席を父と仰ぐ一つの大きな家族が出現すると宣伝されたのであった。ラチラカ・マダガスカル元大統領(Didier Ratsiraka)によれば、金主席はまさに「待望久しい救世主」(55頁)であるとされたのである。

かくして鳴り物入りで、主体思想は世界に向けて宣伝されたのであった。しかしながら、必死のプロパガンダにもかかわらず、主体思想は世界的な評価を得ることはできなかった。主体思想にもとづいて立てられる地上の楽園も実現されることはなかった。その後、多くの亡命者(脱北者)たちによって、北朝鮮の実態が明らかになるにつれて、経済破綻と人間性の蹂躪が極に達していることが知られるようになったのである。

そのような北朝鮮の実態をジェービン(金正日)は次のように語った。「このような職場や住居の選択の自由を奪われ、配給制度やわずかな賃金で手足を縛られ、ただ生きているだけで“敬愛すべき首領様”に毎日感謝しなければならない虐げられた人々を、公式プロパガンダは“この世でもっともすぐれた社会主義体制のもと”で、さらに“地上の共産主義の楽園”で、“この世に羨むべき者を知らず”、“自主的に創造的な生活を享受”していると宣伝につとめている」(173頁)。

なぜ、このようなことになってしまったのであろうか。ジェービンは「金日成と金正日は自ら打ち出したシステムの奴隷になってしまった観がある」(174頁)と言う。金主席は自己を神格化し、ただひたすら至高の思想・主体思想と地上の楽園を掲げるほかなくなってしまったのである。

(三) 文鮮明師と金日成主席の出会い

文鮮明師は1991年11月30日、突如として北朝鮮を訪問され、12月6日、金日成主席との歴史的な会談を実現された。かつて北朝鮮の監獄で3年近く、拷問と過酷な強制労働を受けられた文先生にとって、金主席は恨みの相手であり、また金主席にとって、

勝共運動の推進者であった文師は悪の頭目であって、共に相いれない関係にあった。しかし文先生の真意は、北朝鮮を打倒することではなく、破綻した北の経済を支援しながら南北の平和統一を実現するということであった。そのことを理解した金主席は文師を受け入れたのである。

文師は金主席との会談に先立って、北朝鮮の国会議事堂で「主体思想では南北統一はできない」と述べ、「南北の統一は力によるものや、どちらかが一方的に飲み込むのではなく、頭翼思想、神主義によって、南と北の価値観を統一することによって行われるべきだ」と訴えられた。「主体思想を汚すものは死刑および全財産の没収」とされている北朝鮮で、主体思想を批判するということは考えられないことであり、文師を招待した北朝鮮の高官は真っ青になったという。

しかし文師の命懸けの宣言は、金主席を憎むからではなくて、怨讐を許し、兄弟として愛する、真なる愛に基づいたものであった。そのため金主席は主体思想を批判した文師と会った。その結果、後に北朝鮮の高官が漏らしたように、「主体思想に穴が開いた」のであった。文師の宣言は、完ぺきな主体思想の中で身動きできなくなっている金主席を解放する役割を果たしたのである。

文師との会談の後、金主席は上機嫌であったという。同席した北朝鮮の高官は「主席のあの姿は初めて見ました。主席の新しい一面を発見した思いです」と語って、会談の成功を喜んだ。

文師は北朝鮮からの帰路、北京で次のように語られた。「今回、私は統一教会の創始者として真の愛の精神で北朝鮮に行ってきました。真の愛というのは“愛することができないものまでも愛する精神”です。イエス様も“汝の敵を愛せ”と言ったではありませんか。平壤に入って行った私の心情は秋の空のように晴れ渡ったものでした。怨讐の家に行くのではなく、私の故郷、私の兄弟の家に行くようでした。“許し、愛し、団結せよ”という私の終生の信条を持って北朝鮮の地を踏みました。……今からは葛藤と闘争を終結させて、和解と愛で祖国を統一し、銃剣を溶かして鋤や鍬を作るときです」。

文先生の訪朝の直後、12月13日、ソウルで開かれた南北首相会談において、歴史的な合意文書——「南北間の和解と不可侵および交流・協力に関する合意書」と「朝鮮半島非核化協同宣言」——が調印された。これはベルリンの壁の崩壊に匹敵するほどの劇的な展開であった。

しかしなぜ、突如として、このような事態が到来したのかは、謎であった。タス通信のジャーベンは「それにしても、不倶戴天の仇同士をして、これほどまでに過激な、おおかたの観測筋にとっては予想外の妥協に走らしめた原因は、いったいどこにあるのか？」（『私が見た金王朝』311頁）と問っている。そしてその結果、「冷戦が人類に残していった最後にして最大の難攻不落のバリケード」（同上、310頁）が崩壊する兆しを見せたのである。言うまでもなく、文師と金主席との劇的な出会いが、このような南北の歴史的な雪解けをもたらしたのである。

それから 20 数年の月日が過ぎた。南北の対立はここ数年、危機的な状況に直面している。ここでもう一度、文師と金日成主席の和解の原点に立ち返り、平和統一の道を目指すべきである。そこで主体思想と統一思想（神主義・頭翼思想）とを対比しながら、主体思想の目指す理想が統一思想によって実現しうることを論じることにする。

（四）チュチェ思想と統一思想

1. チュチェ思想とマルクス主義

チュチェ思想は、唯物弁証法と唯物史観のもとで共産主義の実現を目指しているが、人間観において、マルクス主義の限界を超えているという。すなわちマルクス主義において、人間は進化した動物にすぎないが、チュチェ思想では人間は動物と比べて、はるかに次元の違う発達した存在であるという。チュチェ思想に関して最も権威ある文献とされる金正日総書記の「チュチェ思想について」（『金正日文献集』未来社）によれば次のように書かれている。「人間はあらゆるものの主人であり、すべてを決定する」（59 頁）、「人間は自主性と創造性および意識性をもった社会的存在である。……もちろん人間も物質的存在ではあるが、単なる物質的存在ではありません。人間はもつとも発達した物質的存在であり、物質世界発展の特出した所産であります」（60 頁）。

マルクスによれば、人間は労働する動物であり、人間の本質は労働するところにあるとされた。動物にもミツバチ、アリ、ビーバー等のように巣やダムをつくるものもいるが、動物の場合、一面的な限られた生産であるのに対し、人間の場合は、普遍的で自由な生産である。しかしマルクス主義は人間を単に労働する動物であると規定することどまってしまった。それに対してチュチェ思想は、歴史上初めて人間の本質的属性を解明し、人間中心の哲学を創始したという。『金正日文献集』によれば：

マルクス主義唯物弁証法は、物質と意識、存在と思惟の関係問題を哲学の根本問題として提起し、物質および存在の本性を論証し、それにもとづいて客観的世界の運動法則を解明しました。チュチェ思想は世界の物質性と、その一般的な運動法則が解明された条件のもとで、世界における人間の地位と役割にかんする問題を哲学の根本問題として新たに提起し、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するということを論証し、それにもとづいて人間による世界の支配とその改造発展の合法則性を解明しました。チュチェ思想は人間を単に世界の一部分としてではなく、世界を支配する主人に押し上げています。こうしたチュチェ思想の哲学的原理を唯物弁証法の枠内で解釈することはできません（47 頁）。

立教大学名誉教授、「チュチェ思想国際研究所」理事長の井上周八は「マルクスは哲学の根本問題を……世界における人間の地位と役割の問題として提起し解答するまでには到達していなかった」（『チュチェ思想概説』雄山閣、401 頁）という。そして「人

間は自主性と創造性と意識性をもつ社会的存在であり、自然と社会を支配し改造し、自己の運命を開拓することのできる唯一の存在であることを明かにしたところに、チュチェ思想の真髄とその独創性を私たちはみる」(同上、405頁)という。

そのようにチュチェ思想によれば、人間は動物とは本質的に異なる存在であり、人間は自然と社会、そして自己自身に対しても主人である。これは、人間は万物の主管主であるとする統一思想の立場から見て全く異論はない。

チュチェ思想は人間の地位と役割を高めたという点では、確かにマルクス主義を超えたものであるといえよう。しかしながら、なぜ物質的存在である人間がこのような特出した主体性を持つようになったのかという点において、その哲学的根拠が示されていない。唯物弁証法と唯物史観の立場から、いかにして動物的存在から、自然と社会と自己自身に対して主体である人間に飛躍できるのかという問題である。これはチュチェ思想が唯物論に立脚する限り、免れることのできない隘路であろう。

2. チュチェ思想と統一思想

チュチェ思想を検討してみると、思いがけなくも、統一思想との間に多くの類似点が見いだされる。ここでは井上周八の『チュチェ思想概説』において解説されているチュチェ思想を取り上げ、それと統一思想の類似点を挙げてみることにする。

① 人間はあらゆるもの主人である。

チュチェ思想は、人間は自然と社会と自己自身に対する主人であるという。それに対して統一思想は、人間は倫理・道徳に従いながら愛の人格を完成するという責任があり、その責任を全うしたとき、人間は自然と社会の主管主(主人)になると見る。

② 物質の内的構造と主体的属性

チュチェ思想は、すべての存在において内的構造と主体的属性があるという。無生命物質の主体的属性は、目で見ることにも手に触れることもできないが、「作用方向を規定する性質」(60頁)、「自己を保存し、発展させようとする指向性」(70頁)、「他の物質に対する反応性」(83頁)であるという。生命物質においては、主体的属性はさらに発展し、植物では「周囲の環境に能動的に対応する生命」(78頁)となり、動物においては「周囲の世界を利用する生活能力としての本能」(80頁)となる。さらに人間においては「周囲の世界を目的意識的に改造する創造的能力」(80頁)に発展したという。そしてこれらの質的な属性の発展は、物質の量的な結合の発展によって規定されているというのである。つまり物質がより高度に結合した構造を持つことによって、より高度な主体的属性が現れたというのである。

それに対して統一思想では、すべての存在は性相と形状の二性性相を持つと見る。性相面としては、鉱物における物理化学的作用性、植物における生命、動物における本能、

人間における心（生心）を挙げている。そしてそれぞれに対応する、より発達した形状面があるのである。その際、形状が性相を生じせしめているのではなくて、性相はいわば電波のような波動であり、形状はそれをキャッチ（受信）する受信機に相当するものと見る。あるいは形状は性相の担荷体（carrier）の役割であると見るのである。そして性相と形状が相互作用（授受作用）することによって、様々な現象が生じているのである。

③ 愛と善の原理

チュチェ思想では「社会的集団の自主性の擁護に忠実な構造を評価する道徳的カテゴリーを共和国では善と呼び、社会的構成員の創造的役割を評価する道徳的カテゴリーを正義と呼んでいる」（241 頁）という。さらに「ひとりはおみんなのために、みんなはひとりのために」（243 頁）という集団主義の原則が善の原理であるという。つまり社会の利益のために生きることが善の行為であり、それは個人の利益にもなるという。また善を行う人は「いかなる代償も要求しない」、「利害の打算を超越する」（242 頁）のであり、善の原理は愛の原理と一致するという。そして愛について次のように述べている。

「チュチェ思想は統一の基礎は愛であるとみる」（355 頁）。

「愛は生命と生命が結合しようとする人間性のもっとも深いところから生まれる要求である」（355 頁）。

「多くの人を愛し、多くの人から愛され、自然を愛し、自然と調和して生きる人間ほど、より多くの生命を担った社会的人間である」（357 頁）。

「家庭は社会の細胞であるゆえに、愛の細胞でもある。夫婦の愛と親子の愛、兄弟姉妹の愛は人間愛の基礎となる。家族の愛をしっかりと発展させることは、社会的集団の中で愛の原理を具現するうえで重要な基礎になる。家族を愛することのできない人は、社会と人民を愛することができない」（360 頁）。

「憎悪と分裂ではなく、愛と統一を！ これこそが、ほかならないチュチェ思想の要求である」（453 頁）。

統一思想では、愛が人間の最も本質的な属性であると見る。真の愛は「他のために生きる愛」であり「与えて忘れる無条件の愛」である。そして人間は神の愛を中心として、家庭において子女の愛、兄弟姉妹の愛、夫婦の愛、父母の愛を完成しなくてはならないと説く。そして善とは、愛の人格、愛の家庭を築き、それを自然と社会に拡大していく行為をいうのである。このように見るとき、チュチェ思想と統一思想の善や愛の説明はよく似ていることが分かる。

④ 平等の原理

人間は歴史を通じて平等を実現しようとしてきた。しかし今日まで、あらゆる面において平等であるというような社会は実現されなかった。マルクス主義は、人間による人間の支配をなくして、無階級の共産主義社会を実現しようとした。そしてそれは労働者が資本家を打倒し、資本家から労働生産物を取り戻すことによって可能になると考えた。しかしながら革命によって現れたのは、平等で無階級な社会ではなくて、歴史上に類を見ない独裁社会であった。そのことは明らかに、マルクス主義の平等原理が間違いであったことを示すものである。

チュチェ思想によれば、平等は人間の自主性を擁護するための最も基礎的な要求であるが、平等の原理は決して絶対的な最高の原理にはなり得ないという。例えば集団の利益は個人の利益より大切であるから、個人は集団を代表する指揮官の命令に服従しなくてはならない。親子の関係も平等の関係ではない。ゆえに平等が完全に実現された社会を理想社会と見る見解は不十分である。

社会主義社会では、平等の原理よりさらに高い次元の原理が実現されるのであり、それは愛と信義の原理であるという。そしてチュチェ思想の主張する平等とは、「主人としての役割を担当するうえでの平等」(384頁)であるという。

統一思想においても、位置と権利において完全な平等はあり得ないと見る。政府と国民、父母と子女、上司と部下などは主体と対象の関係にあるからである。統一思想から見た真の平等とは、愛にもとづいた平等である。すなわち人間は、愛の人格を形成し、愛の家庭を築き、愛の主人となることにおいて、みな平等なのである。

家庭において、父母が子女をその個性、能力にかかわらず平等に愛すれば、子女には不平や不満は生じない。企業や団体においても、経営者が父母の心情を持って従業員を、その能力にかかわらず、平等に愛し、信頼し、期待すれば、従業員に不満は生じない。そのように愛の人格を平等に認められれば、不平等感はなくなるのである。その時、父母の立場にある経営者は子女である従業員になるべく多く与えようとするのであって、能力の違いによる分配に差があるとしても、膨大な格差とか、経営者による搾取などは自然に消滅していくのである。

愛の主人としての平等について言えば、たとえば教師になるとしても、小学校の教師、中学校の教師、高校の教師、大学教授、校長、学長など、位置において平等ではないが、教師が親身になって生徒(学生)を教え、生徒(学生)から慕われるという師弟の愛を築くことにおいて平等なのである。そこには位置にたいする不平等感は見られない。チュチェ思想のいう、愛と信義の原理のもとでの「主人としての役割を担当するうえでの平等」は、そのような統一思想の平等観と一致するものである。

⑤ 人民の領袖と真の父母

チュチェ思想は理想社会を実現するための方法論として、人民大衆の力を最大限に發揮するためには、統一と団結の中心である指導者と指導体系が必要であると説く。そし

でマルクス主義にはそのような指導方法が欠けていたという。

大衆と党と領袖は運命共同体であるが、地位と役割においてそれぞれ一定の差異を持つ。党は大衆の中核部隊であり、領袖はその最高司令官として、脳髓の役割を果たすのである。領袖は「人民大衆の自主性と創造性と意識性の最高の代表者、体現者」（334頁）、「人民大衆の生命の中心」（445頁）であり、「大衆は領袖を限りなく敬慕し、領袖は大衆を限りなく愛し、慈しむ」（445頁）という。

一方、統一思想では、人類の真の父母の必要性を説く。自己中心的な偽りの愛の中で生きてきた人類を真の愛に導くために、人類の真の父母が必要なのである。真の父母は神の心情を体恤した父母であり、神の愛を中心として、真なる子女の愛、兄弟姉妹の愛、夫婦の愛、父母の愛を完成した父母である。そして墮落した人間の自己中心的な愛を真の愛へと導く父母である。

3. チュチェ思想から統一思想へ

以上、見てきたように、チュチェ思想と統一思想の間には、外的には驚くほどの類似性が見られる。しかし重要な点で差異がある。ここでチュチェ思想の問題点を指摘しようと思う。

① 人間はあらゆるものの主人である

チュチェ思想が人間の地位と役割を高めたことは高く評価されるべきである。しかし既に述べたように、なぜ人間はそのような特別な存在であるのか、ということに対する哲学的根拠がない。人間は社会的存在であるから特別の存在になったというが、それでは、どうして同じく社会的存在である他のサルたちは、人間のようにならなかったのであろうか。人間は肉体的には高度に発達しているのみならず、人間には動物にはない霊人体が備わっているのである。そして人間の霊人体は自動的に成長するのではなく、自己の責任で人格を完成するという責任分担を与えられており、それを全うすることによって成長するようになっている。その結果、動物には見られない創造性を発揮できるのである。人間がこのような霊的存在であることを認めない限り、「人間はあらゆるものの主人である」とは言えないのである。

チュチェ思想の「人間は主人である」という主張に対して、統一思想は「三大主体思想」を提示している。三大主体とは父母と先生と主人のことを言う。そして三つの主体の役割は、それぞれの対象のために生きるということ、すなわち真の愛を実践することである。

父母は子女を愛しながら養育し、子女のために生きる。先生は生徒を愛しながら教育し、生徒のために生きる。主人は部下を愛しながら指導し、部下のために生きる。そのとき、それぞれの主体は三つの主体の役割を同時に行う。すなわち父母は子女に対して、父母でありながら同時に先生でもあり主人でもある。先生は生徒に対して、先生であり

ながら同時に父母でもあり主人でもある。主人は部下に対して、主人でありながら父母でもあり先生でもある。そして三大主体の愛の根源は神の愛である。

チュチェ思想の言う主人とは、三大主体思想の一側面のみをとらえたものであるといえよう。しかもチュチェ思想では主体の主体たる本質的な属性は、自主性、創造性、意識性であると言うが、それらは主体の最も本質的な属性ではない。愛が主体の主体たるゆえんである。

② 物質の内的構造と主体的属性

チュチェ思想は唯物弁証法の立場から出発している。従って精神は物質から派生したものであり、「量が質を規定する」という前提に立っている。ところが「人間の意識が脳髓の属性であるということでは意識の本質はすこしも解明されない」(69頁)とか「物質の質が量を規定する面がある」(85頁)と主張する。チュチェ思想が物質の主体的属性(統一思想では性相に相当する)の役割を強調し、特に人間の意識は脳髓の生理的な研究では決して解明されないと見ていることは全く正しい。しかしながら唯物弁証法に立脚する限り、そこには論理の飛躍があると言わざるを得ない。人間に霊性があることを認めて初めてそのように言えるのである。

統一思想は全ての存在は性相と形状の二性性相であるが、性相が主体、形状が対象であると見る。形状である物質面は、性相である機能や精神を受信し、表現する器である。あたかも、音楽家が心の中に浮かんだメロディーを声帯や楽器で表現するのと同様である。

③ 愛と善の原理

『チュチェ思想概説』に紹介された愛の原理は、あたかも宗教家の愛の説教ではないかと思われるくらいである。統一思想の愛の教えとも共通する点が多い。しかしそこにはやはり問題がある。

チュチェ思想では、資本主義社会では愛が金銭化され、売買され、物質的利害打算に従属しており、愛が破壊されていると見ている。そこで愛を社会化することによって、血縁的で盲目的な愛を、自主的な人間の間での同志的な愛に発展させなくてはならないという。そして「社会化された愛こそ真なる愛である」(361頁)という。このようにチュチェ思想では社会または集団が生命の母であり、そこにおいて真なる愛が生まれるという。しかし、いかにして集団から真なる愛が生まれるのか問題である。集団は愛の集団にもなれば、独裁者の支配する集団にもなり得るからである。

統一思想から見ると、愛は家庭において子女の愛、兄弟姉妹の愛、夫婦の愛、父母の愛という四大愛として現れるが、その根源になっているのは神の愛である。ところが墮落して神の愛から離れてしまった結果、自己中心的で分裂的な愛が生じるようになった。従って真の愛は、神の愛を中心として、家庭において四大愛を実践するときに現れ

るのである。そしてそのような愛を社会において実践するとき、社会は愛に満ちた社会となるのである。チュチェ思想の愛の教えは評価できるが、その愛はどこから来るのか、またいかにして実現し得るのか、その根拠が保証されていないのである。

さらにチュチェ思想では、愛の教えの背後に革命や闘争への説教が必ず見られるという問題がある。「人民大衆の力で問題を解決する方法が、まさに革命的方法である。…革命は闘争に始まり闘争で終わる。これが革命の不変の法則である」(321 頁)、「共産主義社会になると、人類にはより雄大な創造的課題が展開され、これを実現するための社会的集団の壮大な闘争が展開される」(385 頁)、「分裂と憎悪を生み出す根源である帝国主義と戦争勢力を一掃しなければならない」(453 頁)などがそうである。

これらは愛の原理とは全く相いれない内容である。そしてこのような闘争の原理が本音であり、愛の原理は建前ではないかとさえ思われるのである。闘争の原理に基づけば、武力が支配する独裁社会が生まれるのは必然である。善の原理についても、社会の利益のために生きるというだけでは不十分である。愛の人格、愛の社会をつくるというところに善の根拠がなくてはならないのである。

④ 平等の原理

チュチェ思想の平等の原理は、愛と信義の原理のもとでの「主人の地位を占めることにおける平等」、「主人の役割を担当するうえでの平等」であるとされる。しかし実際は、独裁的な党の絶対命令のもとで愛と信義は窒息するしかなかった。したがって、「主人の地位を占めることにおける平等」、「主人の役割を担当するうえでの平等」は実現されなかった。

人類の父母である神様の真なる愛にもとづいた平等こそ、真なる平等である。文師は、真の愛の属性には、同位権、同参権、相続権があり、愛の平等さえできれば、真なる平等が実現されると語られた。

真の愛の属性には、愛に同参(一緒に参加すること)できる同参権と相続権があります。その次には、同じ立場に立てる同位権があります。また、愛を受けるならば、どこでも一緒に行くことができるのです。どこに行っても同参する権限があるのです。このように、真の愛の属性の中には三大属性があるのです。愛の関係を結ぶようになれば、同位権、同参権、相続権をもちます。すぐに同じ立場に立つのです。(『天聖教』第3篇 p. 285)

私たち人間は平等だと言うとき、それはどのような平等のことを意味するのでしょうか。本性による愛を受けるときに、本性的に平等圏をもっているということです。何の平等かといえば、愛を中心としての平等です。愛を中心として、最高の平等圏が決定されます。人に最も重要なものが愛です。神様に最も重要なものが愛なので、

愛の平等さえできれば終わりです。それで、すべて成し遂げることができるのです。
(『天聖教』第3篇 p. 301)

⑤ 人民の領袖と真の父母

領袖は「人民大衆の生命の中心」であり、「大衆は領袖を限りなく敬慕し、領袖は大衆を限りなく愛し、慈しむ」というが、領袖がそのような内容を備えていることが何によって保証されるのであろうか。領袖は人民の父母の立場にあつて、人民を子女として一人残らず愛するような方でなくてはならない。しかし唯物論と無神論に基づく限り、それは不可能であると言わざるを得ない。人類の親である神の心情を知り、民族を超え、国境を超えて、全人類を等しく愛される方でなければすべての人民を導くことはできないであろう。そのような方こそ人類の真の父母なのである。

このようにチュチェ思想の教えには統一思想と類似した点が多いが、そこには暗い影が潜んでいると言わざるを得ない。そこでチュチェ思想がその暗い影を捨て去る時、チュチェ思想と統一思想は共に手を取り合つて、真なる理想世界の実現に向かって邁進できるのではないかと思われる。

その暗い影とは、マルクス・レーニン主義から受け継いだ無神論、唯物論であり、唯物弁証法という闘争の原理、唯物史観という階級闘争理論である。マルクス・レーニン主義の誤りが明らかになった今、チュチェ思想がそのような暗い影を完全に払拭する時、チュチェ思想は統一思想と一致し、チュチェ思想の掲げる理想は統一思想の掲げる理想と共に、実現されるようになるであろう。

文師は北朝鮮を訪問し、金日成主席と会談された後、次のように語られた。

金日成はいくら韓国の宗教や宗教協議会の人々が来ても相手にしないということです。いずれ宗教を受け入れるには、彼らの思想体系と最も近いものを受け入れようとするのです。金日成の思想は神様だけ受け入れるようになれば、完全に我々の思想とぴたっと合うのです。金日成が、「文先生の思想を私たち北側で適用することを許諾しますか、しませんか」と言う時、「私が許諾しなければどうするのですか」と言ったところ、彼が「頼んででもしなければなりません」と言ったのです。このような言葉は真に偉大な言葉です。(『真の御父母様の生涯路程⑨』309-311頁)